NY エッセイ 63

中瀬有紀

ファッションの明かり



WOWの舞台装置模型

ニューヨーク・フッション・ウィーク（NYFW）、秋冬コレクション2016の仕事に従事しています。今シーズンも、ラルフ・ローレン、トミー・フィルフィガー、コーチなどのランウェイとアフター・パーティーにおいて、私はアソシエイト・ライティング・デザイナーという立場で働いています。3年前にいちオペレータとして初めてファッションショーの仕事をしてからその魅力にとりつかれ、今となってはNYFWが開催される2月と9月を毎年楽しみにしています。

ファッションショーの照明デザインの最大の魅力は、映像照明と舞台照明のちょうど中間を求められる点です。舞台照明的な要素としては、光でランウェイを浮き上がらせる演出や、ブランドから提案される洋服のテーマに合わせた物語の表現がよくある例として挙げられます。また照明器材から発せられる光の質だけでなく器材そのものもデザインチョイスの1つであり、光を使ってブランド・イメージを決める場の雰囲気つくりと合わせて、使用する器材の見た目や配線にもこだわるクライアントが多いのもファッション業界の特徴です。したがって、ファッションの照明業務に慣れている照明オペレータの成す仕込みの美しさといったら右に出る者はいません。彼らは、あたかもケーブルを透明にしてしまったかのように不要なものを客の視線から消してしまうよう吊ることができ、素早く綺麗に仕込むための徹底した事前準備の周到さには本当に尊敬します。

ファッションショーにはメディア・ライザーと呼ばれるカメラ台が付き物で、大抵モデルの登場口から道なりに続く正面に設置される場合が多いです。ラルフ・ローレンのようにメディア・ライザーにビデオとスチールカメラがひしめき合って、奥から前に歩いてくるモデルを正面から撮影する伝統的なカメラ位置に加え、コーチのようにジブカメラを含む6台ほどのカメラが会場の至る所からモデルと会場全体を撮影することも念頭に置いて照明を設計します。映像照明の基本である「三点照明法」の応用でランウェイの明かりが設計されますが、上下の客席最前列に座るセレブリティと著名プレスの目線に直接光を入れることなく、また舞台照明の要素を壊すことなくフラットに柔らかい明りを作るのは、毎回挑戦です。映画照明器材は灯体そのものの見た目の美しさに欠けたり調光が不可能だったりライブイベントとして使いにくい反面、カメラには最適な質の明かりです。また完璧なフラット明かりを作るのに相当な台数を要する舞台照明器材は、雰囲気つくりに大変重宝します。こういった映像的要素と舞台的要素の中間でもがくのが、ファッション照明の非常に楽しいところです。

トミー・フィルフィガーのように照明デザイナーのテック・テーブルに映像モニターを毎シーズン用意してくれるブランドばかりではなく、映像基地に顔を出して画を確認する場合が多いように感じます。したがって、ファッションショーの照明デザインには、見た目の美しさを創造する感性と同時に、撮影の知識に長け、カメラを通したときに見えるコントラストを予想して明かり作りをする能力が不可欠だと痛感します。

ランウェイに招待されたVIPとエディターやバイヤーが直接ブランドの売り上げにつながるだけでなく、ほんの数分で世界へと発信される記録された映像と写真による宣伝効果は顕著です。ランウェイが背負うビジネス効果に対し、照明が非常に大きな責任を負っていることは間違いないでしょう。カメラと見た目の両方に良い明りを作るマジックが今年もNYFWで行われています。